

## 杉並区立和田中・「夜スペ」を見る。

この発端は、杉並区立和田中学校で始められようとしていた進学塾「SAPIX」の講師による夜間特別授業「夜間スペシャル(夜スペ)」に対し、東京都教育委員会が中止を求めたことだった。

和田中学校は、リクルート出身の藤原和博氏が校長をつとめる。

この「夜スペ」に対して都教委は

希望しても受けられない場合があり、機会均等の確保に疑問がある  
特定の塾が学校を利用して営利活動をしていると疑われかねない

などと指摘して、再考を求める指導を行った。

しかし都教委は後に、「『夜スペ』は『地域支援本部』(地域の有志などがつくるボランティア団体)が主催する教育活動外」であり、問題点もクリアされたとして、突如容認に転じる。これには石原東京都知事の意向が強く働いたとも言われている。

この「夜スペ」は、マスコミの報道によって一躍全国の注目を集めることとなる。

教育関係者の多くがきわめて批判的だったのに対し、マスコミは概して好意的だったことも特徴的だった。

### 「夜スペは楽しい」というけれど……

私は、「夜スペ」についての論点は、都教委の当初の指摘に尽くされていると思っている。

しかし、本当にこれらの問題点はクリアできたのだろうか。私は、和田中学校を訪れて自分の目で「夜スペ」の現場を訪ねてみることにした。

私が和田中を訪れたのは雨の降る3月の夜。藤原校長が直接対応してくださった。

ひとしきり藤原校長の話をつかがったところで、教室に案内していただく。

この日の「夜スペ」に参加していた生徒は17名。男子4名に対し、女子は13名と圧倒的に女子が多い。

当初は希望者がほとんどなく、ある女子部活の顧問が部員を説得して集めたためだという

SAPIXの講師の数学の授業がはじまる。内容は進学塾の授業そのものである。

この「夜スペ」の風景を、2月28日の毎日新聞はこう報じて高く評価している。



印象に残ったのは子どもたちの表情だ。「授業は楽しい」と生き生きとした表情で口をそろえた。

それはそうだろう。受験のための授業だからといって、無味乾燥とは限らない。同質な少数の生徒が集まれば、効率の良い「わかる楽しさ」も味わえる。

ましてマスコミで連日、全国報道されているのだ。参加した生徒が好意的な反応を示すのは当然である。

こんなことは評価の理由にはならない。問題は都教委のいう「希望しても受けられない生徒」がいたかどうか、その生徒はどう考えているのか、ということだ。

藤原校長は私に、「説明会で、中間テストの合計点が400点以上の生徒のための授業だと繰り返し念を押した」と語った。言外にそれ以下の生徒はだめだと言っているに等しい。実際、当初の希望者のうち2名は説得によって参加を断念させられた、という。

いま和田中の生徒たちの間に、どんな思いが錯綜しているのだろう。「夜スペ」を報じたあるテレビのニュースに、「あれは僕たちの授業ではないから」と冷やかに答えた一般の生徒の姿も映し出されていた。これは、ごく少数の声にすぎないのだろうか。

### 「教育の効率」と「品質」は別

一方、マスコミを中心に「夜スペ」を「成績上位者の『吹きこぼれ』」に対応してこなかった公立学校のあり方に一石を投じたもの」として評価する声がある。

しかし、藤原校長はその著書である「校長先生にな

ろう！（日経BP社）」の中で、こう書いたはずだ。

私立は受験によって偏差値で足切りしているから、『教育の効率』はたしかに上がる。勉強についていけなかったり、極端に素行の悪い子は排除してある『同質集団』なのだから、ある知識を伝えたときに、理解し定着する効率はよい。

だが、これは教育の品質（クオリティ）とは別問題だ。知識が伝わるスピードが上がり、量的な効率が上がるということに過ぎない。より深い思考や豊かな学びといった『教育の効果』がほんとうに高いのかといえば、疑問が残る。

この藤原校長自身の言葉こそ、「夜スベ」に対するもっとも端的な批判ではないのだろうか。

### 「夜スベ」は営利活動ではないのか

都教委のふたつめの指摘である「特定の塾が学校を利用して営利活動をしている」という点はどうか。

市内にも塾の講師が補習を行っている学校がないわけではない。しかし、その場合でも希望者は全員参加できるし、費用など徴収しない。

「夜スベ」は特定の生徒しか受講できず、しかも有料である。まったく質が異なる。

「SAPIXは実費（月額1万8千円）を徴収しているだけで、利益はない。だから営利活動ではない」と藤原校長はいう。しかし、私が和田中を訪ねたとき、藤原校長がこう語ったことを私は聞き逃さなかった。

「SAPIXにとって『夜スベ』だけでは赤字だ。彼らも、学校を使った新しいビジネスモデル開発のためにやっているんだ」

つい本音が出たのだろう。臆面もない発言である。

少子化で、進学塾はどこも生徒の奪い合いになりつつある。「夜スベ」が認知されれば、受験産業にとってはまさに「新たなビジネスモデル」となる。

これと進学実績を上げたい藤原校長の利害が一致したのだ。これが営利活動でなければ、何なのだろう。

### 「地域支援本部」主催というトリック

「『夜スベ』は地域支援本部が主催する教育活動外である」という論理も、成り立つのだろうか。

12月に配布された「和田中の校舎を使って夜間に塾を開きます」という文書は、「和田中学校長 藤原和博」名で出されている。地域支援本部長名ではない。

保護者はこの文書を見れば、当然「学校の主催なのだ」と判断したはずだ。

和田中の校舎を使って夜間に塾を開きます。

平成19年12月18日  
杉並区立和田中学校 校長 藤原 和博

こ済む受験サポートを、全国の公立中学校に先駆けて、地域本部主催で行い、く進学塾。中2の1月から1年間の集中講座。これにて「私立を超えた公立

私は訪問当日、和田中で「夜スベ」の主催者であるはずの地域支援本部の責任者の姿を探した。しかし、そんな人の姿は最後まで一度も見かけなかった。

「地域支援本部主催の教育外活動」などという主張は、とうてい納得できるものではない。

### 藤原校長の姿しか見えない

私は、藤原校長の業績には公立学校が真摯に受け止めるべきものも少なくない、と思っている。

先にあげた「校長先生になろう！」は、先入観を捨てて一読することをお勧めする。共感するところも多いはずだ。

しかし、私がつねに感じたのは、「藤原校長ひとりの姿だけが見えて、生徒や保護者、教職員の姿が見えない」という違和感だった。

もし「夜スベ」が教職員の間で十分議論され、合意の元でスタートした事業なら、マスコミにもっと一般の教職員が登場しても不思議ではない。

現実には、教職員の間では「あの校長に何を言っても無駄だ」というあきらめが蔓延している、という。

保護者の声も聞こえてこない。3月22日、藤原校長は「PTAを学校支援本部の下に統合し、市P連を脱退する」と発表した。

またも主語は「藤原校長」である。この件ではPTA総会さえ開かれていないという。

「互いが競い合うことで、全体の質が向上する」というのが学校選択制の謳い文句だったはずだ。

しかし、杉並区で和田中学校は一人勝ちである。

何かと脚光を浴びる和田中学校を希望する生徒は激増した。一方、地道に教育活動にとりくむ近隣の中学校の生徒減は著しい。他校のPTA活動も、和田中のP連脱退でなんらかの影響を被るだろう。

この3月、教育への市場原理導入のシンボル・藤原和博校長は多大な「業績」をあげて退任した。彼の去った後、杉並の教育には何が残ったのだろうか。